

# 山椒魚幻想

寺 横 武 夫

井伏鱒二の処女作について、死の直前にいた太宰治は次のように述べたことがある。

私は十四の時から、井伏さんの作品を愛読してゐたのである。二十五年前、あれは大震災のとしではなかつたかしら、井伏さんは或るささやかな同人雑誌に、はじめてその作品を発表なさつて、当時、北の端の青森の中学一年生だつた私は、それを読んで、坐つてをられなかつたくらゐに興奮した。それは、「山椒魚」といふ作品であつた。童話だと思つて読んだのではない。当時すでに私は、かなりの小説通を以てひそかに自任してゐたのである。さうして、「山椒魚」に接して、私は埋もれたる無名不遇の天才を発見したと思つて興奮したのである。(『井伏鱒二選集』第一巻後記、昭二三・三、圈点引用者)

開手の側から話の真偽に及ぶまでもなく、話手自らがあらかじめ「嘘ではないか?太宰は、よく法螺を吹くぜ。東京の文学者たちにさへ気づかなかつた小品を、田舎の、それも本州北端の青森なんかの、中学一年生が見つげ出すなんて事は、まづ無い」といった流儀に評判されることを禁忌している。そしてその上で、大正十二年の夏、東京から家兄の持ち帰つた雑誌を見ながら、「その三十種類く、らゐの同人雑誌に載つてゐる全部の作品の中で、天才の作品は井

伏さんのその『山椒魚』と、坪田譲治の小品との二作のみだつた。」とこの「発見」の次第を語っている。

話手の身振りに力がこもるに従い、その「嘘」の中の真実味の方は逆に稀薄になつてゆつていゝの、ある意味ではいかにもこの筆者に似つかわしい行文だが、それはとにかく、彼のこの「嘘」にも一点の事実が秘められていたことは珍重されねばならない。すなわち、井伏鱒二が、「大震災のとし」の「或るささやかな同人雑誌」に発表したという「山椒魚」は、大正十二年七月の『世紀』に掲載された「幽閉」を意味するからである。

太宰が、習作時代の師の作品名を、とりちがえて記憶していたとしても責められるべきことではなかつたはずだ。昭和三十五年前後、米田精一氏によつて右の「幽閉」の初出本文が発掘され(関良一「井伏鱒二『山椒魚』」改稿について、『国文学』昭四一・五)、次いで、その本文と現「山椒魚」との校勘を試みた関良一氏により、「両者は、もちろん互に全く別箇の作品とはいえないけれども、ほとんどさういつていいほど違う」(『山椒魚』「言語と文芸」昭三六・三) 経緯があかし出されてはじめて、現「山椒魚」の、「幽閉」を母胎に生まれたいきさつが具体的に判明したからである。つまり、太宰治は、例えば次のような事実を関知しうる立場になかつたの

である。

大12・7月、「幽閉」の題名で同人雑誌「世紀」（創刊号）に発表。後、昭4・5月、ほとんど全面的に加筆して「山椒魚」と改題、「文芸都市」に掲載したものである。昭5・4月、最初の創作集「夜ふけと梅の花」（新興芸術派叢書）に収録、新潮社より刊行した。その後も一部に若干の字句修正が見られる。（米田精一「山椒魚―井伏鱒二」『国文学』昭三八・九）

さらにいえば、彼を「興奮」させたところの井伏文と、「判文学的立場」（昭四五・六）に復刻された「幽閉」とが、同一本文であることを聞することもかなわなかったのだ。ただ、それはそうだが、無自覚ながらも、門弟がその「思い出」の中に右のような消息に関言していた事実は、やはり一つの因縁としても興味深い。われわれは、その「嘘」に警戒して接するあまり、秘められていた真実性にまで鈍感だったようである。

ところで、この「山椒魚」の成立にまつわる大筋の事情はいま略述したとおりだが、その経緯の委細となるといまだに不明の部分が残されている。書誌上の到達点を確かめるには、関氏の整理に就くのが賢明だろう。

この作品の「改稿」の順序は、少なくとも(甲)原「山椒魚」（大正七年または八年ごろの作。散佚。私は、題はやはり「山椒魚」だと思っている）↓(乙)「幽閉」（大正十二年七月または八月に発表）↓(丙)「？」（「鶯の巣」に発表）↓(四)原・現「山椒魚」（「文芸都市」昭和四年五月に発表）↓(五)同「山椒魚」（「夜ふけと梅の花」昭和五年四月刊所収）↓(六)現「山椒魚」流布本文、ということに

なるう。しかし、「改稿」の度合の甚しいのは、(乙)は別格として、(丙)から(四)へ、(四)から(五)への過程だろう。（前掲「井伏鱒二「山椒魚」―改稿について」）

少しつけ加えれば、(丙)の「幽閉」の掲載月は七月だったこと、(四)以後(丙)以前の段階で、『オロシヤ船』（昭一四・一〇、金星堂）および『シグレ島叙景』（昭一六・三、実業之日本社）にそれぞれ収録された際にも若干の字句修正はあったこと、がその後に確認されている。

われわれが現行の作品上から知りうる岩屋内での悲劇はたしか四五年少々の間に発生したはずである。しかし、こうしてみると、その背後では、この劇を真の悲劇たらしめるために、二十数年間の時日を、あの囚人達が奥深い窓の「暗黒の浴槽」の中で耐え、準備していたのを知らされるのである。

このうち、(乙)ないし(四)以降の、活字化された本文上の動きは大體たどれるとしても、それ以前の、「幽閉」未生以前の幽冥期は混沌のままになお封じられているのが実状である。いわば「山椒魚」的世界の成立期の究明問題だが、とくに、この水中世界に、作者の青春の劇が何らかの形で投影していると考えるかぎりは、それを年代的に特定することも閑却しがたくなってくる。先の関氏は、「幽閉」の遠い原型として、原「山椒魚」、あるいは初稿「山椒魚」とでも仮称すべき習作が実在していたことを予測し、年譜考証の結果、「その原型は、やはり大正八年あたりを中心とし、少くともその後各一年ぐらゐの幅を持たせた、その間に成立していたようだ。」（「山椒魚」『言語と文芸』昭三五・一〇、圈点原文）と、その制

作期をも推理した。以下、わたくしに測滑をおろそうとするのもおおよそその前後の水中世界なのだが、あるいは小蝦一匹住んでいないかもしれない。

\*

のちにやや詳しく見るように、「山椒魚」の成立事情に関しては、作者自身も幾度か触れるところがあった。次の一文もその一種に相当するもので、聞くべきことが少なうにかかわらず、引かれることは少なかつた。早稲田文学編集委員会が、同系の作家を編集させて『現代作家処女作集（早稲田作家編第一集）』（潮書房、昭二八・八）を編み、巻末に収録作家自身の手になる「処女作回想」を付した際、非伏もその求めに応じたものである。

私は福山市の誠之館中学を出た。旧藩時代からの学校で当時は古めかしい建物の一部が残つてゐた。じめじめした中庭があつて、その半坪ばかりの水溜に山椒魚が二ひき飼つてあつた。箱根山椒ではない、二尺内外の大きなやつである。招魂祭のとき旅まはりの香具師が学校に来て、「霞ヶ浦の主」として見世物に出したいから貸してくれと云つた。無論、先生は承知しなかつた。私は早稲田に入學した翌年の夏休暇に、この山椒魚をモデルにして習作を書いた。しかし実休の山椒魚は餌にもらつた蛙など見ると、がぶりと一緒に食つてしまふ。空腹になると自分の手をたべることがある。だから、この小説では山椒魚の生態を部分的に無視してあるところがある。（『山椒魚』について）

右の行文は、中学時代の一体験が、「山椒魚」の作者にとつては

モデルとして意識された原体験だったことを物語っている。体験の印象が鮮烈であれば、それを、後年身近な人に向つて漏らすようなことがあつたとしても不思議ではない。少なくとも、そうとおぼしき形跡が探せぬわけではない。その一つは、「山椒魚に凝つて大拍をした話」を纏めた太宰治の「黄村先生言行録」（『文学界』昭一八・一）にあり、もう一つは、軽妙な人物スケッチを描破した青柳瑠穂の「非伏鱒二十庶民の中の小説家」（『十返肇編』作家の肖像）昭三一・一）の中に求めることができる。

山椒魚に「深山の蟹氣」を感じとつた黄村先生は本邦最大の山椒魚に恋いこがれ、実際は三尺五寸に過ぎなかつたのだが、「身のたけ一丈」という見世物小屋の宣伝を信じ込む。「一丈の山椒魚がこの世に在ると思ひ込んでゐるところが、いちらしいぢやないか」「見世物の山椒魚は、どれでもみんな伯耆国は淀江村から出たといふ事になつてゐるんだ」——あまりにも現実的な小屋の大將のたんに、落胆した先生は、わが夢中の世界から「見事に階段を踏みはずし」て大怪我を負つてしまふ。

むろん、これは太宰一流の有情滑稽の中へ内部の苦渋を解放させた邂逅の世界であつた。それに、もともとこの師弟の紡ぎ出す文学世界は直結するはずもない異質の次元にあるのだが、しかし、そうした両者がかつとも接近した時の例外的な、ほとんど唯一の例証がここにあるのではなからうか。太宰の方で、旅まわりの見世物小屋を持ちだしたり、「あのやうに鈍重に見えてゐても、ものを食ふ時には実に素早いさうで、静かに瞑想にふけてゐる時でも自分の頭の側に他の動物が来ると、パツと頭を曲げて食ひつく、是がどうも

実に素早いものださうで」と主人公に語らせたりしているあたりに  
は、日常的な觀察の中から、井伏の世界のフラグメントの幾片かが  
流れ込んでいる、と考へても無理からぬものが感じられる。

それにくらべれば、青柳文における相似形ははるかに瞭然である。  
井伏文との相違があるとすれば、文をやる上での呼吸の差以上  
には出ないといつてよいほどだ。

だいたい、井伏には動物や樹木を取扱つた小説や隨筆が多いが、  
彼にこういう趣味を仕込んだのは、中学の時の博物の先生で、な  
んでもこの先生が、校庭にれいの山椒魚を飼つていたのでさうだ。  
校庭といつても周りを高い校舎にとりかこまれて中庭で、ポ  
ケの木が植えてあるほかは、錢苔や杉苔がはえて、ジメジメして、  
うす暗かつた。山椒魚はタタミ一畳くらいのコンクリートの池の

中に入れられ、そのぐるりは、手すりでめぐらされて、子供たち  
が休憩時間にいたずら出来ないように仕組まれていたが、それで  
も脱白小僧たちは手すりを乗越えては、カエルを山椒魚にやるの  
が面白かつたさうだ。ところで、いつか、この町に香具師が巡回  
して来て、めずらしい動物を見せるといふものだから、子供たち  
が隊をくんで見物に行くと、なんのことはない、その中には自分  
たちの学校の山椒魚がいたりして、ひどくがっかりしたことがあ  
つたということである。

ところで、「幽閉」以前の、初稿「山椒魚」の執筆時期を大正八  
年前後に求める関良一氏は、そのころ毎夏のように行われた旅行休  
験を重視して、木曾行から因ノ島行などとのからみで、「ひょっとす  
ると、『山椒魚』のイメージも、それらのうちのある夏の旅と結び

ついているかもしれない」(『山椒魚』昭三五・一〇)と考へ、大田  
三郎氏も「木曾には山椒魚はすんでいるからさうかも知れない。」  
〔井伏鱒二「山椒魚」評—チェホフ「賭」との関連から〕「学苑」  
昭四四・一)と述べてそれを継承したことがある。むろん、識閥の  
間に消長する発想の契機を特定するのは不可能だし、またその必要  
もないことだが、後年、作者が再びこの体験を思い浮かべて次のよ  
うに詳述していることは軽視しがたい。すなわち、関氏のいわゆる  
早稲田時代の旅行体験と並んで、あるいはそれに加重するような気  
味あいが、この体験中にはあつたのかも知れないのだ。引用を重  
ねることになつて少々うるさいが、同種のコンテクストを摘記して  
みる。

この内庭の隅に、畳一枚ぶんほどの大きさの浅い池があつた。  
しかも金網の覆いをしてある池だから青苔との調和に欠けてい  
る。この池には二疋の山椒魚を飼つてあつた。一疋は一尺五寸ほ  
どで、一疋は二尺七、八寸から三尺ぐらい。ハンザキという種類  
の大ハンザキである。福山の招魂祭に見世物小屋で見た「印旛沼  
の主」というのは、ハンザキだったが、それと同じぐらいの大き  
さである。これは島先生という動植物学担当の古参の先生の所有  
にかかるともあつた。島先生は寄宿舎の舎監長も兼ね、気難し  
い先生だが、寄宿舎にいた私は、どこかで雨蛙を見つけると、か  
まわず掴まえて来て山椒魚に食べさせていた。(改行)この山椒  
魚の所有主は島先生だから、餌をやるなら島先生の許可を得なけ  
ればいけないが、私のほかにこっそりと餌をやるものがあった。  
初め私は雨蛙を見つけたので掴まえて、掴まえたので山椒魚に食

べさした。それが病みつきで、田圃の蛙を捕つて食べさすようになった。山椒魚がすつと浮いて来て、がぶりと一緒に呑みに入るところが面白い。蛙を捕りに行くときには、私の同級生で寄宿舎も同室の宮原哲三と一緒にいった。(中略)後に私は、早稲田の文科に入って習作時代のころ、山椒魚を主題にして空想で短篇を書いた。無論、宮原と連れだつてよく蛙をやつた山椒魚の凶体や、のっそりとしてユーモラスなところを意識に入れながら書いた。

生きている化石と云われるこの動物は、一年や二年は何も食べなくとも生きている。蛙もそうだ。しかし山椒魚は、あまり餓うくなると自分の指を食つて凄いでいる。そんなことも意識に入れながら書いた。「半生記」「早稲田の森」昭四六・九所収、初出は「私の履歴書」と題して『日本経済新聞』昭四五・一一〜一二

井伏の、福山中学校(現誠之館高校)における寄宿舎生活は明治四十五年から大正五年春まで続いたが、中略部分で同級生宮原哲三氏について「中学二年生」としているのを見れば、大正二年十五歳段階での話かと思われる。が、クロノロジカルな側面はともかくとして、ここで踏まえてみたいのは、初稿「山椒魚」が誕生するためには、こういう「ハンザキ」体験が一種の原風景として作者の胸奥に宿っていたらしいというその点である。

\*

山椒魚についてのこうした原風景が、作者の中で次第に一つの形象として姿を整えはじめるのが次の段階である。井伏満寿二という一学生が、作家井伏鱒二に蟬蛻しようとする過程である。時に、早

稲田大学在学中の大正八年前後、夭逝した青木南八との昵懇を介在させて動きだす世界である。ただ、稿そのものが散佚している現在の原「山椒魚」のたまたまには揣摩憶測のともないがちなものやむをえない。例えば、井伏自身、「早稲田に入学した翌年の夏休暇」「山椒魚」について」と回想する執筆時点一つをとってみても、回想時点の言いまわしによって微妙なへだたりを生じさせてくる。

おそらく、ここで必要な自戒は、回想譚のすべてを頭から信じ込まないでながしの距離をおき、山椒魚の輪郭をいきなり実線で描きあげようと急ぎすぎないことではあるまいか。頭でかちの山椒魚が「岩屋の出入口に頭をくっつけて、岩屋の外の光景を眺め」ていた時、彼の眼は、「ほの暗い場所から明るい場所」を把えていたはずだった。けれども、外側の「明るい場所」から、逆にその「ほの暗い場所」に住むはずの幻の山椒魚を探し求めるには、それよりはるかな困難がともなうと予想されるからにはほかならない。

以下、その原「山椒魚」のたまたまいを求めて、主として作者の述べる言説を中心に整理してゆこう。

まず、この習作は、いつごろ、どういういきさつで執筆されたか。その消息は、すでに紹介した「私は早稲田に入学した翌年の夏休暇に、この山椒魚をモデルにして習作を書いた」という単純さではつくせないものようである。もっとも古い回想としては次のようなものがある。

これはまだ早稲田に在学中、予科二年の夏休みにチェホフの「ベツト」という短篇の刺戟を受け田舎の家で書いた。それを青木南

八に郵送すると、南八は賞与にポードレルの詩集を送ってくれた。「習作時代」昭一〇・一一

これが、最近の、次のような行文に至ると、内容上にも密度が増えられてくる。

予科二年の夏休暇になると、田舎に帰っていた私に青木はしげしげ手紙をくれた。たゆまず試作しろという文面のものばかりであった。私はそれに答える意味で、動物を扱った、小品七篇を青木に送った。がま、蟻地獄、山椒魚、やんま、玉虫など、一つずつ扱いかたに変化を持たせて書いた。そのうちで山椒魚のことを書いたものは、青木が「これは保存して置け」と云ったのでその通りにして、後に少し書きなおして「世紀」という私たちの同人雑誌に「幽閉」という題で出した。それが青木の亡くなった翌年であった。それから二年ぐらい経って、「幽閉」を書きなおして「三田文学」に「山椒魚」という題で出した。試作のうちの一つだから処女作ではないが、自分のものとしては最初に発表した作品である。「処女作まで」「新潮日本文学」月報、昭四五・一一

『三田文学』は「文芸都市」の記憶がよいである。叙述時点が新しくなり、詳細度が増したにしても、その内容に信憑性が増したとばかり受けとれない一例だろう。が、それはそれとして、この二種類の回想を重ねあわせてみると、①予科二年の夏のある時、②青木南八との親交の中から、③動物を扱った小品数篇を執筆し、④その中の一つの、チェーホフの「ベット」から着想されたものが原「山椒魚」だったらしい、とその大略は透視されてくる。しかし、これだけではすっきりしたわけでない。右に付した整理番号の順を追っ

て、もう少し井伏発言を吟味しておきたい。

①執筆時期の「予科二年の夏休暇」は、大正六年九月に予科一年に編入学した井伏において大正七年夏を意味する。ところが、われれにとつてもそうであるように、記憶というものはなかなか御しがたく、井伏自身、「十九歳、予科二年の夏休みに」「作家に聴く」「文学」昭二七・九と語ったところを、のち単行書として上梓される際には「二十一歳、予科二年夏休みに」（中野好夫編「現代の作家」昭三〇・九）と改めなければならないこともあったようだが、それはともあれ、「早稲田に入学した翌年の夏休暇」とか「予科二年の夏休暇」とかある大正七年説は、幾度もくり返されて不動の説得力をもつかに見えながらも、それほど安定性はないのである。もう一つ、「大正八年に夏休みで郷里に帰っていたとき」「半生記」昭四五・一一〜一二という八年説もあるためであり、そして実はその立場の方が有力でさえある。

関良一氏は、炯眼にも、この問題を青木南八（明三一・四・四〜大一一・五・四）との関連で考え、とくにその文学的交友の開始が、青木の「大正八年作の「丘（大原の語）」を井伏側で支持した時点にあったことを踏まえて、原「山椒魚」を執筆したのも、七年ではなく、八年だったらしいことを推理した。井伏たちの学級は、大正八年四月に旧制文学部一年に進学しながら、翌九年四月に再度新制別格一年という課程に在籍させられたという。「ひとたび新大学令にもとづく別格一年からの課程に進んだあと、その前年度（旧制度文学部一年の時期）を回想すると、それは、どことなく学部以前という感じで、その感じが、年月の経過とともに固定し、ついに、実際

には大正八年の夏に書かれた「山椒魚」初稿が「子科二年の夏」すなわち大正七年に書かれたように思い込まれてしまったのではないか。「山椒魚」昭三五・一〇) こうして幻の山椒魚の誕生は、算術上からばかりでなく、心理上からの解明も施こされて寿がれたのである。つまり、井伏からの聞き書きを録した伊馬春部氏のように、「学生時代のある夏休み」(角川文庫「屋根の上のサワン他八篇」解説、昭三〇・一二、「近代名作モデル事典」昭三五・一)といった、一種の手控え気味な姿勢はくずしてもよいかしれない。

②少しのちの「鯉」(大一一・九)もそうだったように、原「山椒魚」が、早大時代の親友青木南八との交流、ないしは彼の慇懃の中から生れたらしいのはさきに瞥見したところからも瞭然である。

他に、「作家に聴く」や「半生記」、あるいは伊馬氏の聞き書き中にもそのことは録されているが、ここには、もう少し異なる視点から話を引いてみよう。

私は子科一年のころには詩のようなものを試作していたが、青木と親しくなつてからは小説の習作をするようになった。青木に見せるために書いていた。(改行)「俺が読んで、この作品は大丈夫だと云えば、その人は作家として大丈夫だ」と、あるとき青木は云つた。「友達の作品を読んで、この男は讚めれば書くか貶せば書くか、それを見極めるのが友人だ」(改行)青木は私の試作を少し讚めたり少し貶したりした。「処女作まで」

「南八は原稿を書くことに絶大な敬意を表し、これを神聖な作業だと思つてゐるやうであつた」(「鶏肋集」ということばも想起されるような光景ではあるまいか。

③ところで、その青木に見せるべく、動物に取材して書かれた習作についても定まった伝承があるわけではない。すでに引いたような「がま、蟻地獄、山椒魚、やんま、玉虫など」「小品七篇」「処女作まで」という七篇説と、「今では散佚して『山椒魚』と『たま虫をみる』(中略)の二編しか残つてゐない」が、「山椒魚」「蟻地獄」「やんま」「藝」等」「それぞれに形式を変へた」「動物を主人公にしたところの五篇」(伊馬春部「解説」とする五篇説との、都合二説が伝えられているからだ。井伏自身は「やんま」「ありじごく」など、すべて動物に関する短いものを七つ)「作家に聴く」、「動物を主題にしたものばかり、小品七篇」(「半生記」と七篇説の立場にいらしい。

右の諸説は題名だけを伝えるものだが、青柳瑞穂氏の、聞き書きもとに綴られた「井伏鱒二十庶民の中の小説家」(前掲)は七篇説に立ちつつ、その具体的な内容にまで及んでいる。すなわち、「山椒魚」以外は、金魚、ヤンマ、蟻地獄、玉むし、鉄砲むし、であり、「残りのもう一種は彼にも思い出せないらしかつた。」「鯉」は別口らしい」とある。すべて幼少期の見聞にもとづく点描らしいが、「蟻の落ちるすがたを、井伏は自分の恋にたくして書いた」という「蟻地獄」、「玉むしが飛んでいるのを見た後に、一度ずつ、自分が不幸を重ねていたのを、点描的に書いた」という「玉むし」、「煙や椎木の中に閉じこめられている」「つまらない動物の、つまらない宿命をあつた」「鉄砲むし」など、それらは、「山椒魚」の世界を構築しつつある次元とまったく絶遠していたとも限らぬものとおぼしい。

所詮はあかしたでられないことに筆を弄しすぎたが、幼少時を反芻しながら、こうした動物譚に触手をのびしつ、山椒魚へも近づく素地がこのあたりに確かめられはしないだろうか。「鈍重な怪魚と自己の悲哀を結びつけた発想が非凡である」(武田泰淳「井伏鱒二」)「群像」昭二六・一一)というより、「旅好き、釣好きの彼が、(中略)オオサンショウウオのイメージと結びついたのは、きわめて自然であり、(中略)もっとも適切な意匠だった。というよりもその意匠には血が通って」(関良一「山椒魚」、昭三六・三)いる消息がうかがいしれるのである。しかも、かつて画家を志し、のちの、日本美術学校在籍中には「鳥羽僧正の鳥獣戯画なども模写」(「鶏肋集」)することさえあった井伏である。「動物ばかり書いたのは何の影響かなあ、たぶんあの頃、絵でも詩でもそうだったが、シンボリズムが流行っていたので、それを手さぐりしたわけだったんだらう」(伴俊彦「井伏さんから聞いたこと、その一」井伏鱒二全集月報三)ということばを、かりに顔面どおり受けとらないとしても、例の「ハンザギ」体験を原「山椒魚」に流し込んでゆく途は、もはや想像にかたくないとみるべきだらう。井伏満壽二が井伏鱒二に化身するのは一つの自然なのである。

④チェーホフの「賭」が、この作品の成立に触媒として働いていたらしいこともくり返し語られてきた。

これは(原「山椒魚」、引用者注)その頃読んだチェーホフの「賭」に感激して書いたもので、「賭」のモチーフである、人間の絶望から悟りへの道程を書こうと思ったので。もっとも悟って行くところは書こうとすると、自分に裏づけがないからどうしても説明

になるのでやめた。「作家に聴く」

これをもっとも代表的なものとして、以下、伴俊彦氏(前出)や米田精一氏(「井伏鱒二」と「山椒魚」)「解釈と鑑賞」昭三一・三)の聞き書き、河盛好藏氏との対談(「井伏文学について」)「対談日本の文学」昭四六・九)にも同種の説明が録されている。ここではこれ以上繰返すゆとりはないが、井伏の依ったチェーホフは、「ベット」という英訳名を挙げていること(「習作時代」)、「ガーネットのチェーホフ全集」を同級生から貸与されたこと(「処女作まで」)などからみて、ガーネットの英訳版「チェーホフ著作集」だった蓋然性の高いことを予想して省筆に従う。

原「山椒魚」のたたずまいは、おおよそ以上のような側面から仮想される虚体としてある。

ところで、所詮は幻像にすぎない「山椒魚」にここまで固執してみたのは、最近、利田利夫氏の手によって、この習作の所在や題名に一閃の光が与えられたからにはかならない。それは青木南八像を照射する余光としてあった。

早大在学中「にいはり」という回覧雑誌をやっていた、それにはたしか井伏鱒二の「山椒魚の嘆き」というのがあった。というのは、その雑誌を南八から見せてもらった際、一番印象に残ったから。(以上は青木南八の中学時代からの親友最上孝敬氏からの聞き書き。最上氏は東大(経)卒で、経済史家、民俗学者。国民金融公庫理事を長く勤めた人。)(改行)最上氏の記憶に誤りがないければ、「山椒魚」は「幽閉」という題で「世紀」に発表される以前に、「山椒魚の嘆き」という題で、そのプロトタイプが出来



上つていたということになる。「井伏鱒二」「鯉」の成立と背景

『日本文学』昭五四・一)

和田氏と同様、われわれも「記憶」に対しては充分慎重に臨まねばなるまいが、幻の「山椒魚」が、早大在学中の、しかも青木らの雑誌に載つていたというのはきわめてありうることではないか。大正八年前後、青木の懇懇によつて試作された動物譚のうち、「山椒魚」の事を書いたものは、青木が「これは保存して置く」と云つたのでその通りにし、「処女作まで」といふ、その青木の声までが聞えそうではないか。関氏の、「私は、題はやはり『山椒魚』だと思つている」「井伏鱒二」「山椒魚」改稿について」と述べた理由が、かりに幾篇かの動物譚との連関から考えられたものとすれば、題名における近似値も珍重されねばなるまい。さらに臆断を重ねれば、端的に押し込まれている彼の「嘆き」こそ、例えば、「賭」は賭に負けて閉じ込められた一人の男が、絶望から悟りにはいる、その「悟りにはいろいろとして、はいれなかつたところ」(伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」)から生ずる嘆声ではなかつたのか。

委細はとにかく、大正八年代の原型をこのようなものとして思い描いてみれば、井伏自身、「後に少し書きなおして『世紀』という私たちの同人雑誌に『幽閉』という題で出した」(「処女作まで」と述べたところまでは、もう指呼の間にあつたはずである。

\*

以上のような推測をも加味して、「山椒魚」の誕生してくる途をたどりなせば次のようになるだろう。

(0) ハンザキ体験(大正二年前後か、福山中学在学中)  
(1) 「山椒魚の嘆き」(大正八年前後か、早大在学中の回覧雑誌「いはり」所載か)

(2) 「幽閉」(大正十二年七月「世紀」創刊号)

(3) 「？」(昭和二年前後か、「鶯の巣」所載か)

(4) 「山椒魚」(「童話」(昭和四年五月「文芸都市」第二巻第五号)

(5) 「山椒魚」(昭和五年四月刊「夜ふけと梅の花」所収)

(6) 「山椒魚」(昭和十四年十月刊「オロシヤ船」所収)

(7) 「山椒魚」(昭和十六年三月刊「シグレ島寂景」所収)

(0) (1) が、これまで探索してきた「山椒魚」未生以前の幽冥期であり、(2) 以降は活字化され、すでに顕現している世界である。そのうち、(4) 以後は大きなヴァリアントの見られない字句修正の次元だが、(3) における山椒魚のみいまだに水中深く没していてその全貌を顕わにしてくれない。

しかし、(7) における最終的な字句修正まで勘案すると、決定稿定着以前には、(1) の原型から数えれば二十有余年、(0) の原風景まで遡れば三十年近い時日が、この誕生のドラマには必要だつたこと、すでに触れたとおりである。むろん、そうはいっても、その劇の作者が、終始一貫同じ構想を追い求めていたのでは決していない。そのもっとも端的なあらわれは、(2) から(4) に至る動きの中に読みとることが出来るだろう。

作者は、そこで、平板な「幽閉」を犠牲にし、かつその犠牲を糧にすることによつて立体的な現「山椒魚」の世界を構築しえたのだつたが、その動きの中へ、先の「ハンザキ」体験という原風景を置

いてみれば、いったい何が見えてくるだろう。

現「山椒魚」が「幽閉」的世界を払拭して質的に転換した最大の分岐点は、人もいうように、一匹の蛙を閉じ込め、それと口論し、あげくに和解させる件を、その後半部へ新たに導入したことに求められねばならぬだろう。対立し、対話する蛙の出現によって、岩屋の世界は立休化し、その暗澹たる悲しみは深みを増したのである。そして、その登場をうながすしこみの役目を担ったのが、「ハンザキ」体験で印象的な役割を演じていた、例の蛙だったのであるまいか。

「幽閉」の世界にも蛙がいなかったわけではない。だが、彼は、山椒魚と対話を交すほどの人物ではなく、あくまで一添景の域を出なかった。「兄弟静かぢやないか？」と語りかけられるのは車えびの方であり、蛙はその車えびに比すれば全く影のうすい存在だったのである。あるいは、せいぜいのところ、山椒魚が露命をつなぐ餌としての役割しか付与されていなかった。「彼はこの二年半の月日の間に、兩蛙を二疋と五尾の目高とを食っただけであつた。彼等は年に一疋の蛙でも食つてゐれば十分なのだ。食へば食はないのに越したことはないけれど。」

ところが、現「山椒魚」の蛙が、「幽閉」における車えびをもはるかに陵駕する重要人物たることは誰の眼にも明らかだろう。なるほど、岩屋にまぎれ込む前には、山椒魚を羨ましがらせる自由の一象徴にすぎなかったのだが、一端幽閉された後には、その密の主入と同年月を過ごし、同様の空腹を味わい、同等に口論するだけのセリフを獲得するに至つたのだ。いや、この暗やみの中で、山椒魚の

「友情」を誘発させる唯一の存在たりえたことが、なによりも蛙のレーゾン・デートルの大きさを物語っている。

こうながめてみると、「幽閉」における蛙は「ハンザキ」体験の内容とも相即した存在であるのに対し、「山椒魚」の蛙の方ははるかに実体験から遊離したところの、むしろ一個独立した虚体、ないしは人格化された作中人物へと変身していることが分明となる。山椒魚自身に関していっても、「幽閉」から「山椒魚」への長い途は、福山在の食欲な大食漢たる大ハンザキが、次第にその実体上の属性を払拭しつつ物語化し、ついにはおそらく思想的にも空腹な一知識人として、みづからの内面を凝視せざるをえないように変容させられた過程を意味していたに相違ない。

すでにながめた、「実体の山椒魚は餌にもらつた蛙など見ると、がぶりと一とくちに食つてしまふ。空腹になると自分の手をたべることがある。だから、この小説では山椒魚の生感を部分的に無視してゐるところがある。」(『山椒魚』について)という作者自身のことばも、その「無視」の仕方、全体のにもっともはなはだしくなつた瞬間から、小説としての「山椒魚」がたち現われてくる機微をよく物語っている。原「山椒魚」から数えても二十二年間にわたるこの水中劇の長い時間は、けだし作者の脳中にあつたハンザキがその実体性を剝落させるのに要した時間であり、井伏満寿二が作家としての自己を発見するのに不可欠の時日だったのである。

(一) 「半生記」における井伏のハンザキ体験譚は、宮原哲三氏の『芦田川物語』(昭四三・五)を引くことで相乗の効果をあげてい

る。「明治四十年の頃から大正六年頃までの芦田川周辺の思い出(あとがき)を語る同書は約四ページにわたる「ハンザキ」の章でそのことに及んでいる。井伏の引用と重ならないように摘記してみよう。桜山千造は著者、井吹益二は井伏、《》内がその原文である。

《教室の南側に、又別の校舎がならび、その間の中庭は日がよく当たらないので、地面には小さい草やコケが生えて一日中じりめじりめしている。この庭の中に小さいコンクリートの池があって、その中にハンザキという大サンショウウオが飼ってある。池は長さ二メートル、巾が一メートル、深さが六十センチほどで、水はいつも緑色ににごり、中のサンショウウオはよく見えない。》

《昼の休みの時間に、千造がいつものようにカエルを与えていると、そこへ同級の井吹益二がやって来た。益二は寄宿舎で千造と同じ室にいたのである。益二は、しばらく見ていたが、千造に話しかけた。／「サンショウウオは、かみつくよ、カミナリが鳴っても放さんそうなのよ。／「いんや、あれはカミナリが鳴らんと放さんのだそうよ。しかし、カミナリが鳴れば放すと思うよ。／「いや、かみついたら放すもんか。昔から、こいつがかみついたら、カミナリが鳴っても何が鳴っても放さんというから、かみついたら、ぜったい放すもんか。》

某日、遠くで雷鳴があつて二人は実験を開始する。

《千造は庭のすみの方へ行つて晷表をつくるイグサを引きむしり、二本つないで一メートルほどの長さのヒモを作つた。このイグサをカエルに結びつけた。／千造はイグサをにぎつてサンショウウ

オの池の中へカエルをぶらさげ、水きわで動かした。益二は笑いながら、そのそばで見ている。やがて、緑色の水の底から黒茶色の大きな頭がにゅうつと浮上がつて来たかと思う間もなく、がばつという大きな音をたててカエルにかみついた。》

《どうだ。ぼくが言つた通りだろう。あの通り、カミナリが鳴つても、いっぺんかみついたら、ぜったいに放すもんか。／益二は、いかにも自信のあるようなことを言っているけれども、サンショウウオが放さないのを見たので、自信を深めたのかも知れない。》

遠雷では勝負がつかないというので、観察を続けることになつた。が、折あしく、鬼の「デンヒョウ」と恐れられている、体操教師の軍曹が校内巡視にあらわれた。益二は逃げ、千造は留まつたが、その間に、雷鳴とは無関係に山椒魚も逃げてしまつていた。《おい、桜山。デンヒョウに油をしぼられつたのう。／「うん。だが、これ見い。サンショウウオはカエルを放したぞ。絶対に放さんことがあるもんか。／「カエルを放したか知らんが、カミナリの音をきいて放したんじゃないぞ。おおかた、デンヒョウの顔を見て、サンショウウオが、口をあけて笑つたんだろう。そのひょうしにカエルが口から飛び出たにちがいないぞ。／「冗談を言うな。サンショウウオが笑うもんか。／だが、二人は思はず顔を見合せて笑つてしまつた。》

(2)「幽閉」について、井伏は「反響を期待して出したわけではなかったが、ある評論家が一行半費して『古くさい』という意味の批評を読売新聞の文芸欄に書いた。反響どころの話ではない。

とても私は恥ずかしかった。自分は作家として駄目らしいと思つた。／＼私はその批評家の名前を忘れかねている。若いとき最初発表した作品を頭ごなしに極めつけられた人は、誰でもその恥ずかしさを忘れることが出来ないだろう。」「(半生記)」と述べているが、この記憶には混濁がある。月評担当は村松正俊氏、作品は「歪な凶案」(昭二・二)を指すらしい。「未来を創造する新人は誰」と題する一文は、「井伏氏は過去の追憶を詩にしてゐる。詩は美しいものである。さうして如何なる人にも追憶がない訳ではない。その故に如何なる人も詩を味ふ事が出来る。その意味から言つてかういふ作品も結構なものである。」と踏まえたとで、「井伏氏は恐らく未来に突入することを知らない人であらう。」(『読売新聞』昭二・二・三)と述べている。「なつかしき現実」(『文芸都市』昭四・八)を損なわれないような場所に身を置こうとするこの期の井伏の一面をついた発言と考えてよい。

(3)「昭二、(中略) 富沢有為男らの同人誌『鷺の巣』に参加、『山椒魚』を発表。」(『現代日本文学大事典』昭四〇・一一)とある浅見淵氏説はまだ確認されていない。同誌について、昭和五十五年三月下旬、某古書目録は「6冊／大14・10(創刊) 大15・7(2巻5号)迄、欠有／鷺の巣社刊、内山淳一他編、稀本／富沢有為男、井伏鱒二」と在庫を報じたことがある。すでに人手に渡つていたのだが、井伏の名も挙げられているところからみるとあるいは、そこにもう一匹の山椒魚がひそんでいたのかもしれない。もっとも、逃げた魚は大きく映ずるのかもしれない。

(滋賀大学教育学部教授)